

ラブレールの泉とサン＝ティ殿 についてのエッセー

岩 下 綾

オルレアンとトゥールの間にはサン＝ティ (Saint-Ay) という名の街がある。フランス国立鉄道 SNCF では、『薔薇物語』の著者の一人であるジャン・ド・マンの出身地、あるいは詩人フランソワ・ヴィヨンが投獄された城があることで有名なマン＝シュル＝ロワール (Meung-sur-Loire) 駅の隣だが、電車は一日に数本が停まるのみで、車に乗らない旅行者にはなかなか行きづらい。しかし、マンから川沿いを歩いて行くと七キロほどで、ちょうどよい散歩コースとなる。その街のロワール川のほとりに位置する邸宅に、ラブレールを含めたユマニストたちが集っていたようである¹⁾。邸宅は、1882年にはすでに壁の一部しか残っていなかったようだが、そこからロワール川に降りていく途中に、「ラブレールの泉」(la fontaine de Rabelais) と呼ばれる水源がある。2023年8月に訪ねると、木々と草に囲まれ苔生した泉がひっそりと佇んでいた [図 1]。

50年ほど前には泉から渾々と水が湧き出てロワール川に流れ込んでいたが、最近では水量がめっきり減ってしまった、と現在の所有者は語る²⁾。泉の背後には、ラブレールの顔を浮き彫りにしたメダイヨンとともに記念碑が据え

1) Henri Clouzot, « Les amitiés de Rabelais en Orléanais, et la lettre au Bailli du Bailli des Baillis », *Revue des études rabelaisiennes* (以下 *R. E. R.* と略す), 1905, p. 157.

図1 ラブレーの泉、著者撮影（2023年8月）



図2 ラブレーの記念碑、著者撮影（2023年8月）



図3 ラブレーの泉と記念碑、著者撮影（2023年8月）



られている [図 2] [図 3]。取材した時は文字を読み取るのが困難なほどに風化していたが、ロベール・ヴィヴィエ (Robert Vivier) の報告に掲載された記念碑の写真には次のように書かれている。

SELON LA TRADITION
RABELAIS
A ÉCRIT ICI LE TIERS LIVRE DE PANTAGRUEL
IL RECOMMANDAIT À CEUX QUI LE LISAIENT
« D'OUVRIR LA BOITE POUR EN TIRER LA
DROGUE ET DE BRISER L'OS POUR EN
SUCER LA SUBSTANTIFIQUE MOËLLE »³⁾

言い伝えによると、
ラブレーは
ここでパンタグリユエルの第三の書を書いた
彼は読者たちに勧めた
「箱を開けてそこから薬を
取り出すこと、そして骨を砕いて中の
滋味豊かなる精髓を啜ること」

2) Nous tenons à exprimer notre profonde gratitude aux propriétaires pour les explications et pour l'accès aux documents ayant grandement contribué à cette étude.

3) Robert Vivier, « Excursion du 3 Mai 1970, Pèlerinage en Orléanais, Saint-Ay, Orléans », *Bulletin des Amis de Rabelais et de la Devinière*, t. II, n° 9, 1970, p. 273. 実際の記念碑とは多少異なり、ラブレーの死後 400 年にあたる 1953 年 4 月の日付と、Rob. J. Boitel の署名の入った記念碑の企画書面には以下のように記されている : « ICI RABELAIS A ECRIT / LE TIERS LIVRE DE PANTAGRUEL / IL RECOMMANDAIT A CEUX QUI LE LISAIENT / "D'OUVRIR LA BOITE POUR EN TIRER LA / DROGUE ET DE BRISER L'OS POUR EN / SUCER LA SUBSTANTIFIQUE MOËLLE" ». とりわけ、「SELON LA TRADITION (言い伝えによると)」の文言が見られない。

ラブレーが推奨するとして鉤括弧内に書かれていることが指し示すのは、執筆順としては二作目、物語上の設定としては一作目の『ガルガンチュア』の「作者の前口上」に登場する、シレーノスの箱の話である。そのくだりを要約すると次のようになる。プラトンの『饗宴』に登場するアルキビアデスは、彫像屋の店先にあるシレーノスの像に例えて、師のソクラテスを賞賛する。シレーノスの像は、見かけは醜いが、真ん中から二つに開くと中に神々の像が入っている。ラブレーはその像を箱に、彫像屋を薬屋に転移させる。薬屋にある滑稽な見かけのシレーノスの箱の中には、高価で貴重な香や薬が入っているが、『ガルガンチュア』という本も同様で、ホラ話ばかりだと軽々しく評価してはいけない。髓が入った骨を見つけた犬が、熱心に骨を噛み砕き、髓を吸るように、外箱からは予想できない価値を持った本の中身を吟味して、読書をするべし、と前口上の語り手は語る。このくだりは、もともとはエラスムスの『格言集』「アルキビアデスのシレーノス⁴⁾」に想を得たものだが、「滋味豊かなる精髓」はラブレーの言葉としてもっとも知られているもの一つである。

ユマニストが集ったサン＝ティの邸宅の持ち主を、Bourgau des Marets, Bourrilly, Heulhard などの19世紀から20世紀初頭の研究者は、オルソン・ロランス (Orson Lorens) だと考えていた。しかし、アンリ・クルゾ (Henri Clouzot) は1905年の論文で、文書館員のジャック・ソワイエ (Jacques Soyier) とともに、ラブレーと親交のあったサン＝ティ領主は、オルソンの父親のエティエンヌ・ロランス (Étienne Lorens) だと、資料調査をもとに説いた⁵⁾。後に、ラブレーのサン＝ティ滞在については、Richard Cooper⁶⁾、Claude La Charité⁷⁾ などによってわずかに言及されるが、その後、大きな成果は確認できない。本稿では、ラブレーのロワール地方における人的関係について、先行研究の記述を参照しながら、泉の周辺的情報を整理する。ラブレーの泉の記念碑に書かれたような、「ラブレーがサン＝ティで『第三の書』

4) エラスムス『格言選集』金子晴勇編訳、知泉書館、2015年、p. 123-164。

を書いた」という言い伝えはどのような事柄に起因するのか、またサン＝ティ領主とはどのような人物でラブレーとどのような関係を持ったのか、ラブレーはいつサン＝ティに滞在したのか、という諸問題を念頭に置いて、先行研究を紐解きながら情報の再構成を行い、ラブレーの交友関係と「言い伝え」の変遷を素描する試みとしたい。

サン＝ティの街について、1905 年の論文でアンリ・クルズは人口 1020 人と記しているが⁸⁾、その後増加して、2017 年の時点では 3454 人となっている⁹⁾。サントル＝ヴァル・ド・ロワール地方、ロワレ県、オルレアン郡、マン＝シュル＝ロワール小郡、ロワール川の右岸に位置しており、ワインで名高い土地だ。

町名は、ラテン語の Sanctus Agilus に由来する。6 世紀のオルレアン子爵で裁判官であったアギルスは粗暴で容赦ないと評判だったが、聖メスマン

-
- 5) 本稿で取り上げるエティエンヌ・ロランスの情報は、指示がない限り、以下に挙げるアンリ・クルズとジャック・ソワイエによる一連の調査に依拠する。発表された時系列に沿って並べると以下ようになる、Henri Clouzot, « Les amitiés de Rabelais », art. cité, p. 156-175 (以後これを論考 1 とする) ; Jacques Soyer, « Bibliographie Orléanaise » *Bulletin de la Société archéologique et historique de l'Orléanais*, 1905, p. 208-211 ; Henri Clouzot, « Le véritable nom du seigneur de Saint-Ayl », *R. E. R.*, 1905, p. 351-366 (以後これを論考 2 とする) ; Henri Clouzot, « Nouveaux documents sur Saint-Ayl », *R. E. R.*, t. VI, 1908, p. 190-195 ; Jacques Soyer, « "Monsieur le Seelleur", Identification d'un nom contenu dans la lettre de Rabelais à Antoine Hullot, datée de Saint-Ay », *R. E. R.*, t. VI, 1908, p. 379-384.
- 6) Richard Cooper, *Litterae in Tempore Belli, Études sur les relations littéraires italo-françaises pendant les guerres d'Italie*, Genève, Droz, 1997, p. 9.
- 7) Claude La Charité, « Rabelais, nouveau Protée et homme de main des frères Du Bellay », *Les Frères Du Bellay et l'Europe, Politique et culture à la Renaissance*, sous la direction de Denis Crouzet, Rosanna Gorris Camos et Loris Petris, Genève, Droz, 2025, p. 339-391.
- 8) Voir Henri Clouzot, « Les amitiés de Rabelais », art. cité, p. 157, note 1.
- 9) Insee : https://www.insee.fr/fr/statistiques/4515315?geo=COM-45269#ancree-POP_T1

が悪事をはたらいた奉公人の一人を厳しく罰しなかったことに触発され、回心してマリア教会を建設し、イエルサレム巡礼を行った。帰路で熱病に罹り、593年8月30日に死去する。遺体は、現在のサン＝ティ教会の内陣にあたる場所に埋葬された。サン＝ティでは毎年、命日を中心に聖アギルスを讃える祭りが開催されている。この聖人の名前が、Saint Agyle、Agyl、Aylと変化し、最終的に Saint-Ay になったようである。現在は Ay を [i] と発音し、サン＝ティと呼ばれている¹⁰⁾。

ラブレーの著作のうち、『ガルガンチュアとパンタグリユエル』シリーズの架空譚に二箇所、書簡に一箇所、計三箇所にサン＝ティの記述が登場する。架空譚の方は、ラブレーの泉の記念碑に言及のあった『第三の書』ではなく、シリーズの四巻目である『第四の書』の序詞、およびギヨーム・デュ・ベレーの死に触れた第27章である。それぞれの記述を見てみると、まず序詞では、中庸・穩健を礼賛するくだりで、ザアカイの話となり、派生した余談の中で、ザアカイの聖遺物の一つを取める場所として、サン＝ティが登場する。

Exemple on petit Zachée, duquel les Musaphiz de S. Ayl près Orleans se ventent avoir le corps et reliques, et le nomment saint Sylvain¹¹⁾.

小男のザアカイが好例でして、ちなみにオルレアン近くのサン＝タイル村の神学博士たちは、ザアカイの遺骨と聖遺物を所持していると自慢しておって、彼を聖シルヴァンと呼んだりしておりますがね¹²⁾。

10) ルネサンス期にはサン＝タイル [sɛ̃.t_aɪ], あるいはサン＝タイユ [sɛ̃.t_aj] やサン＝タイ [sɛ̃.t_ai] などと発音されていた可能性があるが、当時の正確な発音を特定することが困難なため、本稿では現在使用されている発音のカタカナ表記を用いる。

11) Rabelais, *Œuvres complètes, Quart livre*, Prologue de l'Auther, édition établie, présentée et annotée par Mireille Huchon, avec la collaboration de François Moreau, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1994, p. 525.

12) ラブレー 『第四の書 ガルガンチュアとパンタグリユエル 4』 宮下志朗訳、ちくま文庫、2009年、p. 40。

「神学博士」という言葉は、『第四の書』のいくつかの版の末尾に掲載された「難句略解」という語彙集では「トルコ語やスラブ語で、博士や預言者。¹³⁾」と説明されており、『第三の書』第 45 章、道化のトリブレに関するエピソードにも使用されている。翻訳者の宮下志朗は、修道士のことをふざけて神学博士と呼んだと注釈を付している。ザアカイは、中世にベリー地方の森に隠遁した伝説的な聖人である聖シルヴァンとしばしば混同された。彼の聖遺物は、15 世紀にルヴルー市からシェール県のラ・セルに移転されている。いずれにしてもラブレーは、サン＝ティが位置するサントル＝ヴァル・ド・ロワール地方が舞台となった話をしている。

『第四の書』第 27 章は、「パンタグリユエル、英雄たちの靈魂の離脱と、故ランジェー公の逝去に先立つ奇怪な異変について推理をめぐらす¹⁴⁾」という章題がつけられており、ランジェー公ギヨーム・デュ・ベレーの臨終に列席したものの一人として、サン＝ティ領主が登場する。ギヨーム・デュ・ベレー (1491-1543) は、国王フランソワ一世に仕えた外交官、軍人、政治家であり、年代記作家になるという希望を抱く歴史家でもあった¹⁵⁾。弟にジャン・デュ・ベレー枢機卿がおり、兄弟ともにラブレーを秘書兼侍医として任務地に連れて行った。寛容的な政治を行った人物としてユマニストたちから高く評価された。その臨終の様子を、ラブレーは自らの架空譚に次のように描く。

— Il m'en souvient (dist Epistemon) et encores me frissonne et tremble le

13) 『第四の書』、前掲書、p. ii。

14) 『第四の書』、前掲書、p. 256。« Comment Pantagruel raisonne sus la discession des ames Heroicques : et des prodiges horricques qui præcederent le trespas du feu seigneur de Langey » dans Rabelais, *Quart livre*, éd. par Mireille Huchon, p. 601.

15) 国王フランソワ一世にとってのギヨーム・デュ・ベレーの微妙な立場については、以下を参照：Lionel Piettre, *L'Ombre de Guillaume Du Bellay sur la pensée historique de la Renaissance*, Genève, Droz, 2022, p. 158 sqq.

cœur dedans sa capsule, quand je pense es prodiges tant divers et horrificques les quelz veismes apertement cinq et six jours avant son depart. De mode que les seigneurs de Assier, Chemant, Mailly le borgne, Sainct Ayl, Villeneuve laguyart, maistre Gabriel medicin de Savillan, Rabelays, Cohuau, Massuau, Maiorici, Bullou, Cercu, dict Bourguemaistre, François proust, Ferron, Charles girad, François bourré, et tant d'autres amis, domesticques, et serviteurs du deffunct tous effrayez se regardoient les uns les aultres en silence sans mot dire de bouche, mais bien tous pensans et prevoyans en leurs entendemens que de brief seroit France privée d'un tant parfait et necessaire chevallier à sa gloire et protection, et que les cieulx le repetoient comme à eulx deu par propriété naturelle.¹⁶⁾

「それは、わたしも覚えています」と、エピステモンがいった。「ランジュー公逝去の五、六日前に、わたしたちがはっきりと目撃した、なんとも奇怪にして、おそろしい超常現象のことを思いますと、今でも心臓が、心膜のなかでぶるぶると震えてしまいます。アシエ殿、シュマン殿、独眼竜のマイイー殿、サン＝ターユ殿、ヴィルヌーヴ＝ラ＝ギュイヤール殿、サヴィリヤノの医師ガブリエル先生、ラブレー、コユオー、マシユオ、マヨリチ、ビュルー、村長ことセルキュ、フランソワ・ブルースト、フェロン、シャルル・ジラル、フランソワ・ブーレ、その他、故人の友人、親友、奉公人など大勢の方々、すっかり怯えてしまい、じっと押し黙ったまま、おたがいの顔を見合わせたのでありまして、その心中ではだれもが、国家フランスは、その栄光と防衛のためにぜひとも必要な、完璧な武人を、ほどなく喪失することになるのだ、上天は、本来の所有権に帰すべき存在として、この方を要求しているにちがいないと思い、そのように予感したのでしたから。¹⁷⁾」

この場面では、主人の死去の際に集まった家臣や奉公人、友人が列挙されており、トリノ城砦隊長としてギヨーム・デュ・ベレーに仕えたエティエン

16) Rabelais, *Quart livre*, éd. par Mireille Huchon, p. 602-603.

17) 『第四の書』前掲書、p. 258-260。下線は筆者による。

ヌ・ロランヌも、「サン＝ティ殿」として名を連ねている。この中にラブレーの名前も見つけることができる一方で、詳細が不明な人物の名前も多い¹⁸⁾。物語の中の出来事とはいえ、実在の人物の名が散見され、実際のギヨーム・デュ・ベレー臨終の場面と重ねて考えられる可能性がある。

書簡については、「代官の中の代官である代官様 (Monsieur le baillif, du baillif des baillifz)」すなわち、オルレアンの実業家アントワーヌ・ユロ (Antoine Hulot) に宛てた愉快な手紙 (*epistola jocosa*) で¹⁹⁾、執筆地がサン＝ティとなっている。3月1日という差し出した日付はあるものの、年代が記されておらず、本稿でとりあげるアンリ・クルゾの諸論文は、この手紙の執筆年を特定しようと試みるものである。

また、サン＝ティの他に、ラブレーは隣町のマン＝シュル＝ロワールについても作中で言及している。同じく『第四の書』第2章で、体色を変幻自在に変化させるタランドと呼ばれるトナカイの描写を行うのだが、プリニウスから引用したトナカイの特徴を述べた後、最後にマンの町のラバを登場させ、タランドの毛色とラバのそれを比較している。長々と続く博物学的な描写の最後に地元色の濃い要素を引用して、落ちをつけるという手法である。

なお、ラブレーの知人であったとされるオルレアンの司教や聖職者たち (Claude Framberge や Antoine Sanguin) は一時的にマン＝シュル＝ロワールの領主を担うことがあり、隣町のサン＝ティにも居住地を持っていたようだ²⁰⁾。マン＝シュル＝ロワールも、サン＝ティも、ロワール川右岸に位置しており、作品にサン＝ティやマン＝シュル＝ロワールの地名が登場する様子からも、ラブレーがこの地方、あるいは地方の領主であるエティエンヌ・ロランヌに少なからず馴染みがあったことが伺える。

では、『第三の書』をサン＝ティで執筆したという「言い伝え」の起源は、どこにあるのだろうか。アンリ・クルゾの論文を参照しながら、サン＝ティ

18) Mireille Huchon, *Rabelais*, Paris, Gallimard, 2011, p. 274.

19) *Ibid.*, p. 278.

20) Jaques Soyer, «Monsieur le Seilleur», art. cité, p. 383.

で書いたとされるラブレーの手紙の時期を推定し、ラブレーの著作の出版時期を照合して、言い伝えがそれらと合致するかどうか検証したい。そのために、エティエンヌ・ロランスを中心に、ラブレー、ギヨーム・デュ・ベレーの動向を加える形で時系列に沿って概観する。

アンリ・クルゾは、モンピポー城となったエティエンヌ・ロランスの館の、革命前最後の所有者であるデュクルーゼルの文書のうち、1542年から1551年までのエティエンヌ・ロランスに関連する五つの記述を、ジャック・ソワイエとともに整理して、「サン＝ティ殿」が息子のオルソン・ロランスではなく、エティエンヌ・ロランスであることを明らかにした²¹⁾。その上で、サン＝ティ殿に言及したギヨーム・デュ・ベレー、ペリシエ、シュトゥルム、スライダンの書簡をもとに、エティエンヌ・ロランスの行動を時系列に並べている²²⁾。少々長くなるが、ロランスが外交の仕事をはじめてから、サン＝ティの館が売却されるまでの、アンリ・クルゾが論考2で展開した年表を、適宜要約しながらここに訳出する。

エティエンヌ・ロランスは、王室財務官、スイス大使であったジャン・モルレ・デュ・ミュヅ (Jean Morelet du Museau) の下で外交の仕事始める。

1526年6月25日：スイス人の到着を知らせにルツェルンからパリに来て、彼らを急がせるためにすぐに迎えに戻った。

他方でギヨーム・デュ・ベレーは、フランソワ一世の負債が支払われるまで、スイス諸州に人質として拘束されていたモルレの解放を求めるため、1526年にスイスに派遣された。エティエンヌ・ロランスとギヨーム・デュ・ベレーは、この時期にスイスで出会ったらしい。

1528年3月：エティエンヌ・ロランスはサン＝ティ城を取得。

21) Henri Clouzot, « Le véritable nom », art. cité. p. 352-353.

22) « Le véritable nom », art. cité p. 353 et *sqq.* アルチュール・ウーラールの次の著作にもエティエンヌ・ロランスの動向がまとめられている。Arthur Heulhard, *Rabelais, ses voyages en Italie, son exil à Metz*, Paris, Librairie de L'art, 1891.

1528 年 8 月：エティエンヌ・ロランスはルツェルンのジャン・モルレのもとに滞在。

1529 年 5 月：モルレが死去し、エティエンヌ・ロランスは、軍務総監のランベール・メグレの指導のもとで彼の遺品整理を担当。

1530 年 8 月：エティエンヌ・ロランスはパリに戻り、王室関係者にとって有益な文書を探す。同盟の首領たちからの脅迫的な請願に当惑していた。フランソワ一世が同盟諸州に対して介入せざるを得なくなる。

1532 年 12 月 6 日：フランソワ一世が「フリブール市および州の代官と評議員」宛に、エティエンヌ・ロランスの通行権を巡る係争に関し、彼を擁護するための手紙を送る。

とはいえ、自白によれば、任務として彼がスイス諸州に分配するはずだった資金の一部を着服したらしい。おそらくサン＝ティ城の購入資金も必要だった時期。だが、ギヨーム・デュ・ベレーという権力者の庇護があり、エティエンヌ・ロランスはギヨーム・デュ・ベレーのもとで、内通者たちを使ってアウグスブルク、ウルム、ニュルンベルクの資産家たちと、ヴェルテンベルク公の使者を繋ぐ任務についていた。

1533 年 12 月 8 日：会議に出席するため、ギヨーム・デュ・ベレーはアウグスブルクに到着。そこでフランソワ一世に対し、書面で彼の使者たちの活動と効果について説明し、エティエンヌ・ロランスのために便宜を図る。

1534 年 1 月 4 日：フランソワ一世に許され、エティエンヌ・ロランスはフランスへ帰還。サン＝ティ領主の肩書きを得る。

これ以降エティエンヌ・ロランスは、ドイツ、ピエモンテなどでギヨーム・デュ・ベレーの政治を補佐する。

1536 年 6 月：エティエンヌ・ロランスは、ドイツの改革派を帝国側から引き離す任務を負ってメッスに滞在。ギヨーム・デュ・ベレーはバイエルンに赴く際に彼の家に立ち寄った。1536 年の弟ジャンへの書簡で、自身がメッスのサン＝ティ殿の邸宅に滞在していることを伝えている²³⁾。ピエモンテ

23) Mireille Huchon, *Rabelais*, Paris, Gallimard, 2011, p. 313, note 26.

総督の任についた際にはエティエンヌ・ロランスを連れて行く。

1541年7月：帝国軍がフランスの同盟都市であったミランドラを脅かす。軍事準備全般を取り仕切るために、エティエンヌ・ロランスがペリシエの使者とともに派遣される。トリノ城塞の指揮権がエティエンヌ・ロラン스에委ねられる。

1541年9月：カール五世、アルジェ遠征へ出発。

1541年11月：初旬に、ギヨーム・デュ・ベレーはエティエンヌ・ロランスを連れ、リヨンを経由して、月末にバリの宮廷に到着する。

1541年12月4日：フランソワ一世はギヨーム・デュ・ベレーに勲章の首飾りを授け、休息を与えた。エティエンヌ・ロランスは、その際、サン＝ティに帰る。

1542年3月21日：エティエンヌ・ロランスはまだサン＝ティに滞在。

1542年5月12日：ギヨーム・デュ・ベレーはトリノに入り、再び指揮をとったが、病が進行しつつあった。

1542年10月：病状が悪化し、本国への召喚を求める。

1542年11月13日：ギヨーム・デュ・ベレーは遺言を口述する。相続人にエティエンヌ・ロランス、ラブレーが含まれた。

1542年12月初旬：トリノ出発、真冬にアルプスを越え、リヨンに逗留。

1543年1月9日：タラール近郊で、ギヨーム・デュ・ベレーは、近親者と臣下に囲まれて死去する。エティエンヌ・ロランスは、恩人の亡骸をフランス中を通して運ぶ。

1543年1月30日：エティエンヌ・ロランスはサン＝ティに留まり、それからル・マンへと出発する。

1543年3月5日：ギヨーム・デュ・ベレーの葬儀がル・マンで執り行われる。

その後数年分はエティエンヌ・ロランスの足跡に関する記録が残されていないが、

1546年の最初の数ヶ月：フランス東部国境にエティエンヌ・ロランスがい

たことがわかっており、ギヨーム・デュ・ベレーの任務を受け継いだジャン・デュ・ベレー枢機卿の司令のもと、エティエンヌ・ロランスはドイツ諸侯たちとの交渉に取り掛かろうとしていた。

1546年3月末：ロランスはヨハネス・シュトゥルムと協議したのち、フランスに戻り、ジャン・デュ・ベレー枢機卿宛のスライダンの手紙を取りにメッスに寄る。宮廷で任務報告を終える。

1546年4月20日：サン＝ティの城で数日過ごし、すぐにストラスブールに戻る。

1547年1月：シュトゥルムとの会談のためアルザスへ行く。

1547年2月6日：帰路でメッスに寄り、メッスでの苦境を嘆くラブレーの手紙をジャン・デュ・ベレー枢機卿に届けることを引き受ける。

1547年2月12日：サンジェルマン＝アン＝レイで、フランソワ一世にストラスブールに関する陳情を行う。ジャン・デュ・ベレー枢機卿は不在で、エティエンヌ・ロランスは短い手紙を付して、スライダンからの手紙、ヴェルテンベルク公が結んだ条約の写し、ザクセン公の情報、ラブレーの手紙が入った小包を弟のマルタン・デュ・ベレーに渡す。

1547年3月初旬：ストラスブールに戻り、スライダンと会う。

1547年3月17日：フランソワ一世から二通の手紙を受け取り、最後の外交任務を行うはずだったが、二通目の数日後にフランソワ一世が死去する。デュ・ベレー兄弟からの寵遇も終わり、サン＝ティの名前がフランスの外交史から消える。

1551年7月11日：メッスとその周辺の資産をすべて息子に譲渡する²⁴⁾。

1551年11月21日：オルレアンで作成された相続に関する文書に名前があり、この時期にサン＝ティにいたことがわかっているが、エティエンヌ・ロランスの没年は知られていない。

24) Mireille Huchon, *Rabelais*, Paris, Gallimard, 2011, p. 313, note 26. Henri Clouzot, « Nouveaux documents sur Saint-Ayl », *R.E.R.*, VI, 1908, p. 190-195.

1564年8月17日：エティエンヌ・ロランスの未亡人と息子が、サン＝ティの城と土地を、モンピボー領主に売却する。

アンリ・クルゾは、こうして詳細にエティエンヌ・ロランスの行動をまとめることで、アントワヌ・ユロ宛の手紙を出した3月1日にラブレーがサン＝ティにいた可能性のある年代を抽出する。年代の特定に移る前に、ラブレーにとって重要なエピソードのいくつかについて触れておく。

ギヨーム・デュ・ベレーは痛風と中風に罹患しており、1542年11月に遺言を作成する²⁵⁾。相続者たちが招かれ、ラブレーは、年に300リーヴルの聖職禄が与えられるようになるまで年50リーヴルを、エティエンヌ・ロランスは600リーヴルを相続する、とされた。ギヨーム・デュ・ベレー自身は、トリノでの葬儀を行い、妻と同じ聖堂で妻の隣に埋葬されることを望んでいた。しかし、フランスへ帰国する途中、1月9日にタラル近郊のサン＝サンフォリオン＝ド＝レ (Saint-Symphorien-de-Lay) で死去したため、希望は叶わなかった。先に引用したように、ラブレーは架空譚である『第四の書』第27章において、ギヨーム・デュ・ベレーの臨終の場面を描いている。ここで列挙した立ち合い人の中の、「医師ガブリエル先生」は、サヴィリヤノ出身の医師ガブリエーレ・ガッファリであり、ラブレーとともに遺体に防腐処理を施したらしいが²⁶⁾、定かではない。また、ラブレーの二人あとに名が挙げられたクロード・マシュオは、ラブレーがラテン語で書いたとされる『戦略論、ランジェー公の統治と合戦』のフランス語版の訳者である。ラブレー同様、エティエンヌ・ロランスもこの場に立ち会い、この後、一度サ

25) ギヨーム・デュ・ベレーの死去についての描写は以下に負う：Mireille Huchon, *Rabelais*, Paris, Gallimard, 2011, p. 274 *sqq* ; H. Clouzot « Le véritable nom », art. cit. p. 357 ; Lionel Piettre, *L'Ombre de Guillaume Du Bellay*, p. 147 *sqq*. ; *Id.* « Les Morts parallèles de Guillaume Du Bellay et Étienne de la Boétie », *L'Art entre deuil et résistance, Mélanges engagées*, sous la direction d'Anne Teulade, Paris, Classique Garnier, 2023, p. 113-132.

26) Arthur Heulhard, *op. cit.*, p. 170 *sqq*.

ン＝ティに寄ってから、ル・マンに向かう。3月5日にル・マンでギヨーム・デュ・ベレーの葬儀が行われ、弟のジャン・デュ・ベレーがこの街の聖堂に靈廟を建立させた。フランス革命期に破壊されたが、故人の彫像とキャリアティッドは現存している²⁷⁾。

その他に、ラブレーがエティエンヌ・ロランスと近い関係であったことは、ラブレーのメッス滞在時の出来事からも看取される。ラブレーは1546年初頭に『第三の書』出版後、パリ神学部からの攻撃を避けるため、1546年3月から1547年7月までメッスの街に避難する。メッスは当時、トゥル(Toul)とヴェルダン(Verdun)とともに神聖ローマ帝国の自由都市であった。その際ラブレーは、サン＝ティエンヌ教会にほど近い、アン・ジュリュ通り(rue En Jurue)にあるサン＝ティエンヌ殿所有の家に滞在し、メッス市の参事会員(conseiller)に任命されて年120リーヴルを受け取っている²⁸⁾。1547年2月にはサン＝ティエンヌ殿がメッスに到着する。ラブレーは、ジャン・デュ・ベレーに対し、メッスでの儉しい生活の苦悩を訴えた支援依頼の手紙を書いており、それをエティエンヌ・ロランスが取り次ぐことを引き受け、持ち帰る²⁹⁾。年表にもあるように、エティエンヌ・ロランスはそれを枢機卿に直接渡すことはできなかったが、枢機卿宛ての小包の中にラブレーの手

27) Lionel Piettre, *op. cit.*, p. 149.

28) Mireille Huchon, *Rabelais*, Paris, Gallimard, 2011, p. 313 ; H. Clouzot, « Les amitiés de Rabelais », art. cité, p. 159. この滞在の『第四の書』への影響については、次の論考で扱った。Aya Iwashita-Kajiro, « Manduce et ses sources potentielles dans le *Quart Livre* de Rabelais », dans *Les Styles de la différence, Mélanges en l'honneur de Jean Lecointe*, sous la direction de Christophe Gutbub, Anne-Pascale Pouey-Mounou et Suzanne Duval, Paris, Classiques Garnier, 2025, p. 229-241.

29) Henri Clouzot, « Les amitiés de Rabelais », art. cité, p. 159 ; Mireille Huchon, *Rabelais*, p. 313. この手紙の原本は、19世紀にフランス王立図書館に存在していたが、1839年に数学者のリブリによって奪われ、売却されて、行方がわかっていなかったが、ロリス・ペトリス氏がジュネーヴの個人所蔵となっている本書簡を発見し、『ジャン・デュ・ベレー書簡集』に収め出版した。*Correspondance du cardinal Jean Du Bellay*, Paris, Société de l'histoire de France, t. III, 2008, p. 418-419, n° 742 ; *Rabelais, Œuvres complètes*, éd. par Mireille Huchon, p. 1760-1761.

紙を含めて弟のマルタン・デュ・ベレーに託したことがわかっている。このことはラブレーがエティエンヌ・ロランスを信用に足る人物だと考えていた証左の一つとなり得る。

ラブレーのサン＝ティ滞在を直接的に示しているのが、本題のアントワヌ・ユロへの手紙である。ラブレーは、「代官の中の代官である代官様 (Monsieur le baillif, du baillif des baillifz)」に宛てて、滑稽な調子でこの手紙を記す。3月1日の日付はあるものの、執筆年は記されていない。ラブレーが愉快な手紙を宛てたバイイ (代官)、アントワヌ・ユロに関しては、オルレアン市の弁護士だということが分かっている³⁰⁾。彼に関しては、ロワール川流域の商人協会から報酬を得ていたこと、1539年から1540年に市参事会員 (échevin)、1544年から1546年に市参事会員を指名する市評議員 (notable) などを務めたことが、ロワレ古文書館に残された資料に書かれている³¹⁾。

アントワヌ・ユロへの手紙に関しては、二つの出典の存在が知られている³²⁾。一つはフランス国立図書館のデュピュイ文庫に収められた16世紀の写しで、二つ目は、ピエール・ド・レトワールが自身の日誌へ転記したものである。後者は、日付は1609年1月22日とされ、「次のような、オリジナルから抜粋した、愉快だけれども本物のラブレーの手紙を、この日、デュピュイ氏が私にくれた³³⁾」と記されている。ピエール・ド・レトワールの転記は、デュピュイ文庫のものと相違点が多く、誤記もある。なお、アンリ・クルゾもミレイユ・ユションも、デュピュイ文庫のものを出典としている。

30) Henri Clouzot, « Les amitiés de Rabelais », art. cité, p. 168.

31) *Loc. cit.*

32) Rabelais, *Œuvres complètes*, éd. par Mireille Huchon, p. 1758 ; *Tout Rabelais*, édition et translations nouvelles dirigées par Romain Menini, établies par Raphaël Cappelen, Claude La Charité, Nicolas Le Cadet, Myriam Marrache-Gouraud et Romain Menini, Paris, Bouquins éditions, 2022, p. 1938.

33) *Journal de L'Estoile pour le règne de Henri IV*, t. II, 1601-1609, texte intégral présenté et annoté par André Martin, Gallimard, 1958, p. 422-423, cité dans Rabelais, *Œuvres complètes*, éd. par Mireille Huchon, p. 1758.

アントワヌ・ユロがロワール川流域の商人協会の担当弁護士だった際、商人協会は、レルネ村の領主ゴシェ・ド・サント＝マルト (Gaucher de Sainte-Marthe) と訴訟沙汰になったようだ。この友人が担当した案件を、ラブレーは『ガルガンチュア』のピクロコル戦争で描き、ゴシェ・ド・サント＝マルトをモデルにして、レルネ村の屁理屈家で訴訟好きのピクロコル王を登場させたとされる³⁴⁾。

最後に、この手紙には、オルレアン選出議員で税務行政の責任者であったジャン・パイユロン (l'esleu Pailleron)、サン＝ロラン＝デ＝ゾルジュリル＝レ＝ゾルレアンのパイイであるダニエル (le baillif Daniel) の名前と、司教公印管理官 (Le Seeleur) (クロード・フランベルジュ) とが記されている。後者二人は、オルレアン大学法学部でカルヴァンと机を並べていた。

ラブレーは青春時代を過ごしたポワトゥ地方で法律関係者との友情を育んだが、オルレアネ地方でも、法学者の友人を選んでいたのである³⁵⁾。愉快な手紙を送る程度の気が知れた友人たちだったと推察される。

この手紙に記された3月1日はちょうど四旬節の期間だが、では、アントワヌ・ユロに手紙を出したのは、何年だったのか。アンリ・クルゾは本テーマに関する最初の論考 (論考1) で、ラブレーが3月1日にサン＝ティに存在し得なかった年代を除外して消去法で類推する³⁶⁾。なお、この論考の時点でアンリ・クルゾは、先行研究に倣い、サン＝ティ殿はオルソン・ロランスだと考えており、先に挙げた詳細な年表は作成していない³⁷⁾。以下はアンリ・クルゾが除外した年代と理由である。

34) Henri Clouzot, « Les amitiés de Rabelais », art. cité, p. 169.

35) *Ibid.*, p. 168.

36) *Ibid.*, p. 167.

37) 同年のジャック・ソワイエによる論文 (« Bibliographie Orléanaise » *Bulletin de la Société archéologique et historique de l'Orléanais*, 1905, p. 208-211.) で、サン＝ティ殿がエティエンヌ・ロランスであると分析され、その後の論文ではアンリ・クルゾもソワイエの説を支持する。

- 1532-1536年：この期間、ラブレーはリヨンとローマで四旬節を過ごした。
- 1537年：パリにいて、3月にエティエンヌ・ドレの祝宴に参加している。
- 1540-1542年：三度目のローマへの旅で、サン＝ティ殿はピエモンテで任務に就いていた。
- 1543年：3月にランジェ公の葬儀が行われる。
- 1546-1547年：少なくとも復活祭まではメッスに滞在。
- 1548-1549年：ジャン・デュ・ベレー枢機卿に伴ってイタリアに滞在し、1549年の春に、ローマで模擬戦 (Sciomachie) の祝宴に出席。

アンリ・クルズは、上記のすでに足跡がわかっている年代を除き、ラブレーが死去する前までの期間で残るのは、1531年、1538年、1539年、1544年、1545年、1550年であるとする。このうち、1531年、1538年、1539年は、他の資料も含めてほとんど足跡が残っておらず、イタリア遠征と、ランジェ公のもとの任務が始まっていないため、ラブレーとエティエンヌ・ロランスとの友情が芽生える所が見つかからないという理由で、除外する。また、ラブレーの晩年にあたる1550-1553年も、晩年のものとするには書簡の筆致が陽気すぎるとして、除外する。なお、1550年はカルヴァンが『蹟きについて (De Scandalis)』を著して、ラブレーを無神論者だと批判した年である。

残るのは1544年説と1545年説である。前年の1543年1月9日にギヨーム・デュ・ベレーが死去し、3月5日にはル・マンで葬儀が執り行われる。その後、1545年9月19日の『第三の書』の印刷を6年間に渡って許可する王の特許状まで、ラブレーの消息は明らかになっていない。そこから逆算し、アンリ・クルズは、確証はないとしながらも次のように推測する。ギヨーム・デュ・ベレーの葬儀がル・マンで執り行われた後、エティエンヌ・ロランスとともにラブレーはサン＝ティに帰ってきて、悲しみを癒しながらロワール河畔の泉の近くで仲間と過ごし、『第三の書』を書き上げたのではないか。つまり、『第三の書』が1546年に出版される前の、1544年3月1日か、1545年3月1日に、サン＝ティからアントワヌ・ユロへ手紙を書いたの

ではないかと考える。

「言い伝えによると、ラブレーはここでパンタグリユエルの第三の書を書いた」という、ラブレーの泉の記念碑に書かれた文言は、おそらくこのアンリ・クルゾの論考を根拠としているものと考えられる。しかし、事態は必ずしも期待通りに進まない。現在の研究において、ラブレーによるアントワヌ・ユロへの手紙は 1542 年 3 月 1 日に書かれたというのが定説なのである。この説は、後に同じくアンリ・クルゾとジャック・ソワイエによって手紙の年代が再検証され、提示された（論考 2）³⁸⁾。論考 2 では、最初の説を妨げる要素はない、としながらも、エティエンヌ・ロランスに関する詳細な年表を作成し（本論で先に要約したもの）、ラブレーが 1539 年 12 月から 1542 年 12 月までイタリアに滞在した折、一時的にフランスに戻った可能性があることを見逃していたと表明する³⁹⁾。すなわち、1541 年 11 月末に、ギヨーム・デュ・ベレーは、エティエンヌ・ロランスを伴って、フランスに一時戻っていたのだが、痛風に起因する熱にしばしば悩まされていた状態で、真冬に、イタリアより寒いフランスへと移動するにあたって、侍医を置いていくとは考えにくい。つまり、彼らのフランスへの帰国には、侍医ラブレーも同伴し、1541 年 11 月末にリヨンに到着したのではないかと、この説を展開する。

ちょうどこの時、ラブレーがラテン語で書いた『戦略論、ランジェー公の統治と合戦』がセバスティアン・グリフ社に手渡され、1542 年に出版されている⁴⁰⁾。その現場にラブレーが居ないよりは居たと考える方が研究者の想像を掻き立てる。

ミレイユ・ユシヨンの校訂版プレイヤード叢書でこの手紙の編集を担当し

38) Henri Clouzot, « Le véritable nom », art. cité, p. 351-366.

39) *Ibid.*, p. 364.

40) この著作は現存していないが、ラ・クロワ・デュ・メヌの書誌（1584）、およびデュ・ヴェルディエの書誌（1585）に掲載されている。Mireille Huchon, *Rabelais*, p. 266. なお、ラ・クロワ・デュ・メヌの書誌の初版が慶應メディアセンターに所蔵されている。Premier volume de la bibliothèque du Sieur de La Croix du Maine [...], Paris, A. L'Angelier, 1584. [120x@608@1]

たフランソワ・モロー (François Moreau)⁴¹⁾ や、*Tout Rabelais* で書簡を担当したクロード・ラ・シャリテ⁴²⁾ を含め、アンリ・クルゾの第二の説を支持するラブレー研究者が多く、サン＝ティにおいてラブレーがアントワヌ・ユロへ宛てた手紙の年代を、1542年3月1日とする説が有力となっている。『第三の書』の出版が1546年であるから、手紙を書いたのはその4年前となり、この時期に、後に『第三の書』となるテキストを書いたことは、否定はできないが確証もない。確かに、1534年か1535年に出版された前作『ガルガンチュア』の後であり、1546年の『第三の書』出版の前の時期であるから、1542年のサン＝ティ滞在で『第三の書』を執筆したと言えなくはないが、出版2年前の1544年説、さらには1年弱前の1545年説ほどは執筆の可能性は高くない。サン＝ティの地名が登場するのは『第四の書』であることに鑑みても、決定的な証拠となる文書が今後発見されでもしなければ、サン＝ティで『第三の書』を書いたと断定はできない。とは言うものの、そもそもラブレーとサン＝ティ殿との関係の親密さに鑑みれば、アントワヌ・ユロに手紙を書いた滞在時とは別の時期に、ラブレーがサン＝ティを訪れていた可能性は低くはないと言えるだろう。したがって、サン＝ティで『第三の書』を書いていないかもしれないが、書いたかもしれない。あるいは『第四の書』や『第五の書』もまた、サン＝ティで書かれたのかもしれない。こうして「言い伝え」は現実と物語虚構と本当らしさが混在した形で後世に引き継がれていく。

本稿では、ラブレーの泉にまつわるラブレーの「言い伝え」の源を、先行研究の論考の変遷を辿りながら探った。その過程で、ギヨーム・デュ・ペレーの外交で活躍したエティエンヌ・ロランズとラブレーの接点を概観し、ロワール河畔におけるラブレーと法律関係者の交友関係の一端を覗いた。

フランスでは毎年9月に「ヨーロッパ文化遺産の日 (Journée de la

41) Rabelais, *Œuvres complètes*, éd. par Mireille Huchon, p. 1758.

42) *Tout Rabelais, op. cit.*, p. 1938.

Patrimoine)」が開催され、歴史的建造物や文化施設の無料公開やお祭りが企画される。サン＝ティでも、2023 年 9 月にラブレーの泉に関する催しがあった。筆者の出席は残念ながら叶わなかったが、記念碑と泉の煤払いが行われたようで、演劇、朗読、歌を合わせた発表があったことがプログラムから伺える。また、2014 年の「文化遺産の日」には、サン＝ティ在住の作家クリスティアン・フェル (Christian Fer) 氏によって、ラブレーのサン＝ティ滞在を主題にした短編小説「夢の墨 (l'encre du rêve)」が読み上げられた⁴³⁾。エティエンヌ・ロランスの邸宅の前、泉のほとりで『第三の書』を執筆中に、筆が進まず微睡むラブレーは、たびたび白いブラウスの少女に出会う。『第三の書』に描かれた、結婚の可否についてのパニユルジュの悩みを体現するかのようになり、少女は結婚に関する良し悪しを経験して変化していく。あまりに現実味のある少女の姿に驚き、ラブレーはロランスに少女の身元を尋ねるが、存在を知らず、その代わり、泉の周囲では時折不思議なことが起きるとロランスは答える。後日、ラブレーがトゥール市の画家フランソワ・クルエ (François Clouet) のアトリエに赴いた際、絵の中に夢の少女を見つける、という小話である。作者はこの話の最後に「寓意」を付す。「歴史とは、それについて語ることを許された者たちの記録に基づいて構成されているにすぎない。記録される機会を得られなかった出来事は、歴史の一部とは見なされない。しかしその中には、歴史の小さな物語をより深く理解する手がかりとなる出来事も含まれているのだ⁴⁴⁾」と。

ラブレーが同時代の政治、宗教、国際問題を、想像力を駆使したフィクションと融合させて表現したように、ラブレー自身の人生も、史料と人々の夢想と創作とともに現実と虚構の間を揺れながら言い伝えられていくようだ。

43) 2023 年 9 月 15 日の時点でサン＝ティ市のホームページ (<https://www.ville-saint-ay.fr>) で読むことができたが、ホームページの刷新とともに掲載が終了している。

44) « L'Histoire se limite à ce que rapportent les écrits des gens autorisés à parler d'elle. Les faits qui n'ont pas eu la chance d'être rapportés n'en font pas partie. Et pourtant il y a parmi eux des faits qui permettraient de mieux comprendre les petites histoires de l'Histoire. » (Christian Fer, *L'encre du rêve* より)